ヘンレク・ポントピダン『夜警』研究
－Ursula の死から考察する『夜警』の多次元構造－

デンマーク語専攻　神﨑大智

目次

はじめに

第 1 章　作家紹介と『夜警』概要
1.1. 作家紹介
1.2. 作品概要

第 2 章　『夜警』作品分析 1－Ursula Branth を殺したのは何者か
2.1. 主人公 Jørgen Hallager が殺したのか
2.2. 主人公の妻 Ursula Branth 自身が殺したのか
2.3. Ursula を取り巻く人間関係（階級対立）が殺したのか
2.4. 社会が殺したのか

第 3 章　『夜警』作品分析 2－作品舞台の考察
3.1. ローマに具現される文化的二側面
3.2. コペンハーゲンと金婚式－政治闘争の終着点

第 4 章　『夜警』作品分析 3－『アウニーデと人魚』との間テクスト性
4.1.『アウニーデと人魚』の作品概要
4.2.『アウニーデと人魚』との間テクスト性

おわりに
資料
1.『夜警』のあらすじ
2.『アウニーデと人魚』のあらすじ
3.『雲』序文（訳は筆者による）
使用テキスト
参考文献
インターネット資料

要約

19 世紀後半，欧州諸国では自然科学の発展により，それまで築き上げられてきたキリスト教に根ざした文化的固定観念に疑念が生じ，その価値観から脱していく流れにあった．そしてこの価値観の変化により，本当の自由とは何か，そしてそこから見出しうるあらゆる事象における真実とは何かという問題意識が大きく取り上げられるようになっていた．その傾向はデンマークにももちろん伝播し，政治や文化面で大きな闘争が起こるようになる．このような激動の時代で，社会や人々の生活を現実主義的に描写したデンマークを代表する自然主義作家がヘンレク・ポントピダン(Henrik Pontoppidan, 1857-1943)である．

本稿は彼の創作における中心的作品となる初期中編小説『夜警』*Nattevagt* (1894)の分析を通して，この作品の多次元性に迫っている．構成としては第 1 章では作家の略歴と，19 世紀後半のデンマークの歴史的背景を交えた『夜警』の概要をまとめ，第 2 章から作品分析を進めている．

第 2 章では，作品のクライマックスである主人公の妻 Ursula Branth の死に着目した．主人公 Jørgen，Ursula 自身，彼女を取り巻く人間関係（階級対立），そして社会という 4 つの要素がその死の原因として仮定できるのではないかという観点から分析し，Ursula の死によって浮かび上がる『夜警』の多次元的構造を紐解いた．

第 3 章では作品舞台に焦点を当てている．『夜警』は四部構成のうち，第一部から第三部までがイタリアのローマ，第四部がデンマークのコペンハーゲンを舞台に物語が展開されている．なぜポントピダンは全ての主要登場人物たちがデンマーク人のみの小説であえて舞台をローマに設定したのか，そしてなぜ最終部では舞台をコペンハーゲンに移したのか．この二つの問いを出発点とし，作品舞台がもたらす多次元構造を際立たせる効果を示した．

そして第 4 章では『夜警』と H.C.アンデルセン（H. C. Andersen, 1805-1875）の戯曲詩『アウニーデと人魚』*Agnete og Havmanden* (1833)との間テクスト性に着目している．ポントピダンはなぜ好評を博した『人魚姫』*Den lille havfrue* (1837)ではなく，その元であり，世間からの評価が芳しくなかった『アウニーデと人魚』を再話した

のか．この疑問を分析の出発点とし，この戯曲詩が『夜警』に与えた影響と，両作品が相互的に与え合っている影響を示し，時代を越えた文学作品の持つ解釈の可能性を考察した．

このような構成で『夜警』を分析した結果，Ursulaの重要性とこの中編小説の多次元性，さらには文学作品が時代を越えて影響を与え合うことを示し，そして『夜警』の解釈には永遠の可能性があると結論づけることができたが，本稿が明らかにしたことはそれだけではない．本稿における最も重要な結論は，ポントピダンは卓越した技術により人間や社会をただ写実しているという観点に立ち返ることで得られた．その結論とは，この作品における多次元構造は我々人間の，そして我々が生きる社会を描出しているに過ぎない．すなわち，人間や社会は複雑に絡み合う超多次元な構造を持ち，互いに影響を与え合っているということだ．我々は『夜警』のように，いや，それよりも遥かに複雑で難解な多次元構造を持つ社会を生きている．ときにはその多次元性に圧倒され，逃げ出したくなることもあるだろう．そのようなときに，本稿が示した『夜警』の解釈の「永遠の可能性」を思い出してほしい．複雑で超多次元な人間や社会との向き合い方にもその「永遠の可能性」が眠っているのだ．そのことに気づくことができれば，変化を続ける世界で答えのない問いにぶつかったときに，逃げ出すのではなく，前を向いて新たな視点での解釈を探し続けることができるのではないか．その探求の旅路こそが人間に生の喜びの一つを与えてくれるのではないだろうか．本稿がこの永遠の旅路における次の一歩の一助となれば幸いである．